

現在分詞 *growing up* の非局所性について

谷 光 生

1. 現在分詞の分布

現代英語における現在分詞句ないし現在分詞節（以下、両者とも現在分詞と略記）の統語上の分布は、おおよそ、次の(1)から(3)に例示されるとおりのものである。¹

(1) a. The child was *sleeping* then.

b. He lay *sleeping in his bed*.

(2) While *sleeping soundly*, he heard a loud noise.

(3) a. a *soundly sleeping* child (McCawley 1998²:391)

b. a child *sleeping soundly* (McCawley 1998²:391)

(1)の現在分詞は一次的ないし二次的な述語として機能しており、(2)のそれは分詞構文の一部として機能している。(3)では、主要部名詞 *child* を修飾する要素として、名詞前位置 (prenominal position) もしくは名詞後位置 (postnominal position) を占めている。なお、(3b)の現在分詞は縮約関係節 (reduced relative clause) とみなされる場合もあり、また(3a)は縮約関係節を名詞の前位置

1 以下の本稿で示される多くの引用例は、引用元の趣旨を変えない範囲で、その一部を斜体化したり、各種の記号を挿入したりなどの改変を行っているが、本稿全体の可読性を優先するため、改変に関する逐一の断り書きをつけていない。

に移動させたものとされる場合もある。

本稿が議論の対象とする語連鎖 *growing up* も現在分詞の一種と捉えられる事例が数多く観察され、次の (4) から (6) に示されるとおり、上で確認した現在分詞一般の分布とほぼ同様のものが認められる。

(4) a. The child was *growing up* in poverty.

b. He spent his formative years *growing up in a small town*.

b'. Did you have many books in your house *growing up*?

(*The Boston Globe*, 20 July 2017 [web])

b". "[...] My father has owned and operated a successful meat and produce distribution company for 30 years, I have always had a job *growing up*, but [...]." (*Pro Hockey News*, 24 Jan. 2009 [web])

b"". I cannot begin to count the number of times I heard it *growing up*, at least once every month or two from the time I was seven or eight until I left home and was beyond redemption.

(*The Dream Catcher: A Memoir*, Margaret

A. Salinger, Pocket Books, p. 226)

b"". He sure doles it out, though. I love him, my brother and I were the best of friends *growing up*, you know, but I have to admit that he's a bastard.

(*The Dream Catcher: A Memoir*, Margaret A.

Salinger, Pocket Books, p. 428)

(5) a. *Growing up*, I was a huge fan of the band.

b. I heard little, *growing up*, about the family business other than as a joke his dopey father got him into.

(*The Dream Catcher: A Memoir*, Margaret A.

Salinger, Pocket Books, p. 39)

- (6) a. **a growing up (in a small town) child*
 b. *a child growing up in a small town*

(4a)が一次的述語の例で、(4b)から(4b''')までが(おそらく)二次的述語の例である。(5)は分詞構文における現在分詞である。((5b)における *growing up* はカンマに反映される休止が認められるため、二次的述語ではなく、分詞構文における現在分詞であると解される。)(6)は主要部名詞に対する修飾要素としての例であるが、(6a)のとおり、*growing up* は名詞前位置における修飾要素としては容認されない。その理由は *growing up* 自体の特異性によるものではなく、現在分詞一般の性質による。すなわち、次の(7)に示されるとおり、現在分詞が名詞前位置で修飾要素として機能するためには、現在分詞(の句ないし節の主要部)と(被修飾要素となる)主要部名詞が隣接する必要があるが、(6a)の *growing up* はこの一般条件を満たしていないため容認されない、ということである。²

- (7) **a [sleeping soundly] child* (McCawley 1998²:391)

2. 現在分詞の意味上の主語

統語上の分布がどのようなものであれ、現在分詞はその意味上の主語が当該の現在分詞の局所に生起する必要があると一般にいえる。

この点を確認すると、次のようになる。すなわち、(1a)のような一次的述語

2 ただし、この一般条件は次のような難易構文 (tough-construction) に関連する現在分詞には適用されない。

- (i) *a [hard to find] first edition* (McCawley 1998²:392)

また、次のような過去分詞 *grown up* は、書記言語上ハイフンがしばしば用いられることから推測されるとおり、語として再分析された構造をもつと考えられるため、ここの一般条件とは無関係である。

- (ii) *a [grown-up] baby*

としての現在分詞の場合、その意味上の主語は、当然ながら、その述語の統語上の主語であり、たとえば先行文の統語上の主語や目的語であってはならない。

また、(1b) のような二次的述語の場合、その意味上の主語は一次的述語の主語ないし直接目的語である必要があり、一次的述語の間接目的語や前置詞の目的語であってはならない。この点は次に示されるとおりである。

- (8) a. John gave Bill the dog dead. (Williams 1980:207)
 b. I presented it to John dead. (Williams 1980:204)
 b'. *I presented John with it dead. (Williams 1980:204)

すなわち、(8a), (8b) における二次的述語 *dead* の意味上の主語は直接目的語の *the dog* ないし *it* であり、間接目的語の *Bill* や前置詞 *to* の目的語である *John* ではない。(8b') が容認されないのは、二次的述語 *dead* の意味上の主語を前置詞 *with* の目的語 *it* としているからである。

(2) のような (通常) の分詞構文の場合、現在分詞の意味上の主語は主節の主語と一致しなければならないが、懸垂分詞構文 (*dangling participle clause*) の場合であっても、現在分詞の意味上の主語にはある種の制限が課せられる。すなわち、懸垂分詞構文における現在分詞の意味上の主語は、早瀬 (2009), Hayase (2011), 早瀬 (2012), 早瀬 (2017) によると、概念化者 (*conceptualizer*) である必要があるということである。

なお、懸垂分詞構文全体としては、次の (9) にまとめられるような性質があるといえ、この点は (10) の例にうかがえるとおりである。

- (9) 懸垂分詞構文が容認されるのは、概念化者が典型的には話者と一致し、分詞節での行為をおこなった結果主節内容が知覚される、というシナリオ的意味を表す場合である。 (早瀬 2017:43)
- (10) Leaving the bathroom, the immediate lobby is fitted with a pair of

walnut wall cabinet.

(早瀬 2009:72)

すなわち、(10) においては、概念化者が現在分詞において *leave* という「行為」をおこない、その結果、主節であらわされる内容を概念化者が「知覚」したということである。

(3) のような名詞前位置ないし名詞後位置における修飾要素においても、現在分詞の意味上の主語は、その現在分詞を含む名詞句の主要部名詞である必要があり、どこか離れた位置に生起する別の名詞句内の主要部名詞であってはならない。

以上のような、現在分詞における意味上の主語に関する性質を「局所性」(*locality*) と呼ぶとすると、(4) から (6) における *growing up* も（自明のこととしていちいち確認はしないが）局所性を満たしていることになる。

3. *Growing up* における非局所性

現在分詞一般は局所性を満たすものといえるが、興味深いことに、*growing up* については、この局所性を満たさない例が数多く観察される。

次の (11a), (11b) では、いずれの *growing up* も懸垂分詞構文における現在分詞として機能しているように見える。

(11) a. *Growing up* in the Mennonite tradition, music was always a part of life, Kaufman said. (City Pulse, 16 Jan. 2019 [web])

b. “*Growing up*, the dolls I had were all tall, thin, and didn’t look like an actual person ... As I grew older, I thought, aren’t I supposed to get taller? Aren’t I supposed to look like that?”

(CBC Kids News, 12 Dec. 2019 [web])

が、ここでの *growing up* は懸垂分詞構文の現在分詞ではない。なぜなら、ここでの現在分詞 *growing up* においては、概念化者における「行為」がおこな

われているとはいえ、また概念化者により主節の「内容が知覚され」ているわけでもないからである。(これらの文は、*growing up*という状況に付随する事態について述べたものであり、概念化者が*growing up*という状況を通じて、事態を知覚したということであらわしたのではない点に注意されたい。)

以上より、(11)における*growing up*は通常に分詞構文の現在分詞はもとより、懸垂分詞構文における現在分詞とも異なるため、その意味上の主語は局所性を満たしていないといえる。³ なお、これらの*growing up*が仮に二次的述語や、名詞前位置ないし名詞後位置の修飾要素だったとしても、もちろん、局所性は満たされていない。

次例(12)では、文末の*growing up*が一見、二次的述語として機能しているようであるが、仮にそうだとしたら、局所性は満たされていないことになる。

(12) He repeated this story to me many times *growing up*.

(*The Dream Catcher: A Memoir*, Margaret A. Salinger, Pocket Books, p. 125)

なぜなら、先行するコンテキストから、この文の主語*he*は父を指し、*me*はその父の娘であることが明らかであるが、このことから、*growing up*の意味上の主語が前置詞*to*の目的語である*me*であることが確定されるからである。(代名詞*he*と*me*の指示関係から明なはずであるが、この文全体の趣旨は「私が幼かったころ、父は何度もこの話を私に繰り返し聞かせた」というものであり、

3 本文の(11)に対応するような構造において、完了形の*grow up*が容認されるのかどうか、現在のところ不明である。この点は今後の調査にゆだねる。なお、次の例における斜体のフレーズ*having grown up ...*は、先行する*my vantage point at the time*の同格要素と考えられ、今後の調査対象とすべきものとは異なると考えられる。

(i) Of course, their way is simple too, especially with three or four children, but from my vantage point at the time, *having grown up in a family of two, and then as a mother of one*, it seemed militaristic.

(*The New York Times*, 24 August 2014 [web])

常識や一般的信条に反する「父が幼かったころ、父は何度もこの話を私に繰り返し聞きかした」という意味は伝えられていない。) 二次的述語の意味上の主語は一次的述語の主語ないし直接目的語であった点を想起されたい。

なお、ここでの *growing up* が (通常の、もしくは懸垂の) 分詞構文であっても、もちろん、局所性は満たされていない。また、この *growing up* が名詞前位置ないし名詞後位置の修飾要素である可能性はないといえそうである。なぜなら、その際には、被修飾要素が修飾要素を一般に受け付けけない代名詞 (ここでは、*he* ないし *me*) にあたることになるからである。

次の (13) は、(12) の類例と思しきもので、ここでの *growing up* も一見、二次的述語のようである。

- (13) My father often told me *growing up* that his father pressured him to learn the business of J. S. Hoffman and Co., importing Polish meats and other high-end foods.

(*The Dream Catcher: A Memoir*, Margaret A. Salinger, Pocket Books, pp. 33-34)

この文のコンテストは (12) と同様であり、「私の父は私が幼かった頃、...であると私にしばしば伝えた」という趣旨であるが、そうすると、*growing up* の意味上の主語は間接目的語の *me* となり、仮にこの *growing up* が二次的述語であったとしたら、局所性が満たされていないということになる。

なお、ここでの *growing up* が (通常の、もしくは懸垂の) 分詞構文であったとしても、もちろん、局所性は満たされていない。また、ここでの *growing up* は名詞後位置の修飾要素とは考えられない。なぜなら、*growing up* の直前に位置する要素が代名詞の *me* であるからである。

次の (14) では、*growing up* が名詞後位置を占める修飾要素のようであるが、そうだとすると、局所性は明らかに満たされないことになる。

- (14) a. “I respected that she was so open about [her life *growing up*] and to see how it shaped her future was really thrilling to read.”

(*The Baltimore Sun*, 26 April 2018 [web])

- a'. [...] and you talked about growing up in Brooklyn as a baseball fan, and how did [your life *growing up*] turn you into the storyteller that you are? (COCA)

- b. She gave it a lot of thought and she bought him something to show him how much she loves him, a first edition of “A Hitchhiker’s Guide to the Galaxy”. Penny remembered that it was [his favorite book *growing up*]. (*The Big Bang Theory Wiki* [web])

- c. Whenever R9 makes its grand debut, though, it’s going to be a “reg-gae-infused” album (Rih-ggae?) that’s inspired by [her favorite childhood songs *growing up* in Barbados].

(*Vulture*, 23 Dec. 2019 [web])

(14a) は she で指示されるある著書に対する I の感想であるが、その趣旨は「彼女が自身が子供であったころの生活について（著書の中で）隠すところがないのを私は素晴らしいと思うし、…」のようなものである。このため、ここでの *growing up* は名詞後位置に現れた修飾要素といえそうだが、その場合は意味上の主語が *life* ではなく、（あえていえば）she もしくは her となり、局所性は満たされない。

なお、斜体で示した代名詞 *it* が *her life growing up* を指示しており、*her future* と対比されているという点からも、*growing up* は名詞後位置に現れた修飾要素といってさしつかえなさそうである。

また、ここでの *growing up* は分詞構文の現在分詞や二次的述語ではないといえる。なぜなら、もしそうだとすると、いずれの場合においても、「彼女自身が子供のころ、自分自身の生活について隠していなかった」とような意図となるが、そのような意図がないことはコンテキストから明らかであり、さらに一

般常識からしてもおかしな話となるからである。

(14a') は会話文で、子供のころの生活が現在の生活にどのような影響を与えたのかという趣旨のことが述べられており、*growing up* が *life* に対する名詞後位置における修飾要素であるといえそうである。もしそうなら、*growing up* の意味上の主語は（あえていえば）*your* となり、局所性は満たされていない。

なお、ここでの *growing up* も分詞構文の現在分詞や二次的述語ではないといえる。なぜなら、*growing up* がそれらのうちのいずれかだとすると、休止（ポーズ）を伴って発話され、書記言語上はカンマが用いられるはずであるが、そのような様子はうかがえないからである。また、この *growing up* が分詞構文の現在分詞や二次的述語であるなら、意味上の主語が *your life* となり、*your life growing up* は「あなたの生活が成長している」のような異常な意味をあらわすことになるため、やはりこの *growing up* は分詞構文の現在分詞や二次的述語ではない。

(14b) の趣旨は「...それが、彼が子供のころに（彼が）好きだった本だった、とペニーは覚えていた」というもので、*growing up* は名詞後位置に現れた修飾要素であるといえそうである。その限りにおいて、*growing up* の意味上の主語は *book* ではなく、（あえていえば）*his* となり、局所性は満たされていないことになる。

なお、ほぼ自明のため議論は省くが、ここでの *growing up* が分詞構文の現在分詞であるとか、二次的述語であるとかいう可能性はないといえるだろう。

(14c) の趣旨は「...彼女がバルバドスで育ったころに彼女が好きだった子供時代の歌に影響された...」のようなもので、やはり *growing up* が名詞後位置に現れた修飾要素と解される。*growing up* の意味上の主語は *songs* ではなく、（あえていえば）*her* となり、局所性は満たされていないことになる。

ここでの *growing up* についても、分詞構文の現在分詞であるとか二次的述語であるとかいう可能性はないといえるが、議論は省く。

(14) の類例と考えられるものを (15) として下に追加しておくが、(15a)、(15b) では「子供時代の本」、(15c) では「子供時代の経験」のような意味があら

わされているはずである。

(15) a. They were among [my absolute favorite books *growing up*].

(COCA)

b. It was one of [my very favorite books *growing up*].

(COCA)

c. Rush, the youngest of three girls, said [her experiences *growing up* were not the same as Walls' — the author and her siblings dealt with serious poverty — but she did have an “unconventional” childhood.

(*The Baltimore Sun*, 26 April 2018 [web])

以上、ここでの *growing up* はいずれも局所性を満たしていない—すなわち、いずれも非局所的な *growing up* である—という点を確認した。

4. Growing up と文法化

前節では、非局所的な *growing up* が数多く存在するということをみたが、視点を変えると、「これらの *growing up* にはそもそも主語がないのだ」ということを確認したことにもなりそうである。つまり、これらの *growing up* は「文法化を経て、機能的要素になりつつあるといえるかもしれない」ということである。

なお、動詞が文法化を経て前置詞に再分析される現象は広く知られているが、ここでの *growing up* は目的語を従えることもなく、また(11a), (14d)のように修飾要素が後続する場合もあるため、前置詞とはいえない。むしろ、これらの *growing up* は、(11) から(13)の場合には副詞的に機能する何らかの修飾要素へと再分析されたり、(14)の場合には形容詞的に機能する何らかの修飾要素へと再分析されたりしているといえそうである。

この点で、次の(16)における *growing up* は示唆的で、いずれの例においても「子供のころに」のような意味をあらわす副詞的な修飾要素として機能している

と捉えるのが、最も自然であると考えられる。

- (16) a. Reynolds Price died a couple of days ago. He was 77 years old. In my house *growing up* his name always elicited a special tone when uttered, one of joy reserved for the kind of person who possessed the very best kind of literary brain.

(*Rodes Fishburne's Blog*, 23 Jan. 2011 [web])

- b. I still remember [_{NP}the art books [_{Rel.CI}my mom used to keep throughout our house *growing up*]].

(*Seth's blog*, 29 June 2012 [web])

- c. Lesley Stahl: So the music was in your house *growing up*.

(*CBS News, 60 Minutes*, 28 Oct. 2018 [web])

(16a) の趣旨は「…私の家では、子供のころ、彼の名前がいつも…」のようなもので、ここでの *growing up* を分詞構文の現在分詞ないし二次的述語と捉えることは困難であろう。まして、名詞後位置の修飾要素とは考えられない。(16b) の趣旨は「私が子供のころ、母が家中に置いておいた芸術の本を今でも覚えている」というもので、(16c) の趣旨は「子供のころ、そんな音楽がいつも家の中に流れていた」というものである。いずれにおいても、問題の *growing up* を分詞構文の現在分詞や二次的述語、名詞後位置の修飾要素に分類することは難しい。

同様に、次の (17) も示唆的である。

- (17) It's so out of the realm of my experience that it hadn't occurred to me until that moment just how far we'd come, and how very, very different my son's world is from [mine *growing up*].

(*The Dream Catcher: A Memoir*, Margaret A. Salinger, Pocket Books, p. 433)

ここでの *growing up* は、直前の要素が代名詞 *mine* であるため、名詞後位置における修飾要素であるとはいいづらいが、*my son's world* 「息子の世界」と *mine growing up* 「子供のころの私の世界」が対比されていることから推測されるとおり、形容詞的な機能を果たしている要素であることはほぼ確実であろう。

ここでの文法化における過程がどのようなものであるのか、その詳細については今後の研究にゆずるが、*growing up* の意味機能上の変化については、下のような過程が背後にあるのではないかと考えられる。

(18) IN THE STATE OF GROWING UP [predicate]

↓

YOUNG / IN ONE'S CHILDHOOD [adnominal modifier]

↓

FROM ONE'S CHILDHOOD VANTAGEPOINT [adverbial modifier]

5. 動名詞としての *growing up*

次の (19) で斜体により示される「動詞 + *-ing*」形は、現在分詞ではなく、動名詞であると考えられる。

(19) a. I'm looking for a job *driving cars*. (Quirk et al. 1985:1272)

b. We can offer you a career *counselling delinquents*.

(Quirk et al. 1985:1272)

c. There is plenty of work (for us) *shoveling snow*.

(Quirk et al. 1985:1272)

d. We can offer you a job *cleaning cars*.

(Swan 2017: § 115.2)

というのも、これらの形式が現在分詞であるのなら、その意味上の主語が *job*,

career などであるはずだが、実際にはそうではないからである。この点は、たとえば (19a) の斜体部のパラフレーズが、インフォーマントによると、次の (20) のようになる点からもうかがえるとおりである。

(20) a job that involves driving cars

(19) における動名詞は *job*, *career* などに対する同格要素（に近いもの）として機能しているようであるが、詳細は不明である。⁴

以上のような、同格的要素として機能する動名詞と捉えられる *growing up* も、数多く確認される。このような *growing up* は3節および4節で検討した現在分詞としての *growing up* とは峻別されるべきものであるため、以下、簡単に観察を行う。

次の (21a), (21b) における四角カッコ内の表現では、「子供のころの経験」のような意図があるのではなく、「(どこそこで) 成長した経験」のような同格表現的な意味があらわされているといえる。

(21) a. In this interview, Mabarak discusses [his experience *growing up on the east side* and eventually joining in the military].

(*The Detroit Historical Society* [web])

b. In his element in his grow room, waxing poetic about harvest-altering variables, Horton shares [his experience *growing up on the East Coast* and being arrested three times for marijuana possession], each time for less than two grams of cannabis (and one time for just

4 インフォーマントによると、(19a) のパラフレーズは (20) が適切であり、次の (i) のように、*of* を用いた典型的な同格構造によるパラフレーズにはどこか違和感があるという。

(i) a job of driving cars

詳細は不明であるが、ここでの動名詞の機能は同格であるとは簡単にはいえないようである。

a seed).

(Portland Monthly, 22 March 2021 [web])

というのも、*growing up ...*と等位接続されている *eventually joining ...*ないし *being arrested three times ...*の存在から、同格表現的な意味以外のものは得づらいからである。「[陸軍に入る経験]「逮捕される経験」といった同格表現的な意味以外の意図があるとは捉えがたい点に注意されたい。

以下、類例を挙げておくが、(22a), (22a')では「(どこそこで)成長した年月」のような意味、(22b)では(21)同様に「(どこそこで)成長した経験」のような意味、(22c)では「(どこそこで)成長した生活」のような意味が、それぞれあらわされているはずである。

- (22) a. At last, sleep overtook Russ, with pleasant dreams of [his happy years *growing up with his mother, father and brother*].

(*The Doggo Trail*, Earl N. Neese,
Tate Publishing and Enterprises, p. 22)

- a'. I was, at this point, a Confederate youth, a born and bred Southern white boy, carrying assumptions about white superiority and black inferiority that I had absorbed during [my first 17 years *growing up* in the South]. In other words, I was a racist.

(*The Chronicle of Higher Education*, 16 Oct. 2016 [web])

- b. Walls, who chronicled in her 2005 memoir “The Glass Castle” [her experiences *growing up* in poverty with a family that constantly moved from place to place], spoke at the Water’s Edge Events Center in Belcamp to a sold-out crowd.

(*The Baltimore Sun*, April 26, 2018 [web])

- c. And that was [my life *growing up* in white western America in the 1950s]. (COCA)

なお, (15c) と (22b) との比較, および (14a), (14a') と (22c) との比較から明らかとなり, 同じ名詞 *experiences, life* に対して *growing up* が果たす機能は異なるため, 注意が必要である。(15c), (14a), (14a') における *growing up* は現在分詞であり, 名詞後位置における修飾要素と機能している。一方, (22b), (22c) における *growing up* は動名詞で, 同格的要素として機能している。

参考文献

- McCawley, James (1998²) *The Syntactic Phenomena of English*, Chicago University Press, Chicago.
- Naoko Hayase (2011) “The cognitive motivation for the use of dangling participles in English,” Klaus-Uwe Panther and Gunter Radden (eds.) *Motivation in Grammar and the Lexicon*, John Benjamins, Amsterdam, pp. 89-106.
- Quirk, Randolph, Greenbaum, Geoffrey Leech, Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Swan, Michael (2017⁴) *Practical English Usage*, Oxford University Press.
- Williams, Edwin (1980) “Predication,” *Linguistic Inquiry* 11, 203-238.
- 早瀬尚子 (2009) 「懸垂分詞構文を動機づける『内』の視点」, 坪本篤郎・早瀬尚子・和田尚明 (編) 『「内」と「外」の言語学』, 開拓社, p. 55-97.
- 早瀬尚子 (2012) 「英語の懸垂分詞構文とその意味変化」, 畠山雄二 (編) 『英語の構文研究から探る理論言語学の可能性』, 開拓社, p. 57-69.
- 早瀬尚子 (2017) 「分詞表現と談話標識化とその条件—懸垂分詞からの構文化例—」, 天野みどり・早瀬尚子 (編) 『構文と意味の拡がり』, くろしお出版, p. 43-64.